【論文】

藤岡蔵六論（上）

関口安義

藤岡蔵六は芥川龍之介の一高時代の友である。東京帝大の哲学専修をトップで卒業、大学院に籍を置き、哲学研究室の副手をつとめたこともある。その後ドイツに留学、エドマンド・フッセルにつき、哲学研究に従事した。が、帰国後内定していた東北帝国大学に就任できないという事情が生じる。そのプロセスは出隆の「藤岡事件とその周辺」（『出隆自伝』）にくわしい。失意の中で藤岡は新設の甲南高校に行くが、体を壊し、教師生活も全うできなかった。芥川は藤岡を「常に損をするは藤岡の悪き訳にあらず。只藤岡の理想主義者たる為なり」と言い、さらに声を大にするかのように「世間は藤岡を目して辣腕家と倣す。滑稽を通り越して気の毒なり」とも言う（エッセイ「学校友だち」）。本稿は芥川のエッセイに導かれ、一人の不遇な哲学者の生涯に光りを当てる試みである。

キーワード：芥川龍之介、宇和島、キリスト教、一高、父と子

はじめに

芥川龍之介に「学校友だち―わが交友録―」[1]という興味あふれるエッセーがある。小学校以来出会った幾人かの友人について寸評を加えたものだ。その中で府立三中時代の山本喜誉司、一高時代の井川恭という二人の親友を押さえ、一番多くの文字を用いて語られるのが、藤岡蔵六なのである。まずはその全文を書き写すことからはじめたい。

藤岡蔵六　これも高等学校以来の友だちなり。東京の文科大学を出、今は法政大学か何かに在り。僕の友だちも多けれども、藤岡位損をした男はまづ外にあらざるべし。藤岡の常に損をするは藤岡の悪き訳にあらず。只藤岡の理想主義者たる為なり。それも藤岡の祖父に当る人は川ばたに蹲まれる乞食を見、さぞ寒からうと思ひし余り、自分も襦袢一枚になりて厳冬の縁側に座り込みし為、とうとう風を引いて死にたりと言へば、先祖代々猛烈なる理想主義者と心得べし。この理想主義を理解せざる世間は藤岡を目して辣腕家（らつわんか）と做（な）す。滑稽を通り越して気の毒なり。天下の人は何と言ふとも、藤岡は断じて辣腕家にあらず。欺かし易く、欺かされ易き正直一図の学者なり。僕の言を疑ふものは、試みにかう考へて見るべし。――芥川龍之介は才人なり。藤岡蔵六は芥川龍之介の旧友なり、その旧友に十五年来欺されてゐる才人ありや否や。（藤岡蔵六の先輩知己は大抵哲学者や何かなるべければ、三段論法を用ふること斯くの如し。）

『芥川龍之介全集』には、藤岡蔵六宛書簡が十四通収録されている。どれもが芥川評伝に欠かすことのできない内容をもつ。芥川龍之介をよく理解した藤岡蔵六という人のイメージが、芥川書簡からは浮かぶのである。

ところで、わたしは右の「学校友だち」の記事が黙過できないのだ。一体芥川のいう「藤岡位損をした男はまづ外にあらざるべし」の「損」とは何なのか。「世間は藤岡を目して辣腕家と做す。滑稽を通り越して気の毒なり」と言われた内実はどういうことなのか。長い間、わたしはこの疑問にとらわれていた。芥川が「三段論法」を用いて彼を弁護しなければならなかった背景には何があったのか。

一九八〇年代はじめに菊地弘・久保田芳太郎両氏と『芥川龍之介事典』[2]の編集に着手した際、「藤岡蔵六」の項は無論当初から候補にあがり、ある程度の分量を割くことにした。執筆には宮坂覺氏を当てた。氏は早くから芥川の失恋に際しての藤岡宛書簡の意味を評価していたからである。しかし、この時点では、その晩

年や没年月日も確認できなかった。若き芥川龍之介に影響を与えた人物としての藤岡蔵六を調べ上げる必要性を、この頃からわたしは強く意識するようになった。だが、宮坂氏が『事典』に書いてくれたこと以上の内容は、なかなか把握できなかったのである。

そうした中で、何冊かの芥川研究書を出し、のちに『芥川龍之介とその時代』[3]にまとまる芥川評伝を書きつつあったわたしは、芥川の一高時代に井川恭に次ぐ親しい交わりのあった藤岡蔵六という存在を、何としても突き止めなくてはならないと思うようになった。芥川の作家的出発を考えようとしていたわたしには、藤岡蔵六の存在が大いに気になったのである。だが、『芥川龍之介事典』刊行後しばらくは、芥川の他の仲間ー豊島与志雄・松岡譲・成瀬正一らの研究に追われ、手がつかなかった。また、研究への手がかりも得られなかったのである。研究にも時が必要である。が、やがてその時が訪れることとなる。

一　藤岡蔵六への旅

『芥川龍之介事典』刊行後七年、わたしは『芥川龍之介の手紙』[4]という本をまとめた。この本にわたしは、芥川龍之介の一九一五（大正四）年三月九日付藤岡蔵六宛書簡を引き、そこに書き留められた連作短歌十二首に言及した。とくに「かばかりに苦しきものと今か知る「涙の谷」をふみまどふこと」に、旧約聖書「詩篇」第八十四篇の影響があることを書きつけた。芥川は失恋という痛手の中で、「詩篇」に慰めを得ていたといえよう。彼は「詩篇」の嘆願の詩に、自らの悲しみを重ねて右の歌を作って親友藤岡蔵六に送ったのである。藤岡ならば自分の苦しみを理解してくれるとの思いが芥川にはあったにちがいない。

またこの連作短歌には、「わが友はおほらかなりやかくばかり思ひ上がれる我をとがめず」「いたましくわがたましひのなやめるを知りねわが友汝は友なれば」などという歌もある。「わが友」はいうまでもなく書簡の宛主の藤岡蔵六である。これらの歌からも芥川がいかに藤岡蔵六を信頼し、己の苦しみを訴えていたかが伝わってくる。「辣腕家」どころではない。友の苦しみを黙って受け止め、理解するおおらかな、そしてやさし

い人柄を連想させるのである。

わたしは『芥川龍之介の手紙』で、以下のように藤岡蔵六を紹介した。

藤岡蔵六は龍之介の一高・東大時代の同級生である。愛媛県の宇和島の出身。明治二十四（一八九一）年二月十四日の生まれなので、龍之介より一つ上ということになる。一高の二年になって龍之介は自宅通学から寮生活に変わるが、その時入ったのが中寮三番であり、藤岡は井川とともに同じ中寮の仲間であった。藤岡は純粋な理想主義者であり、龍之介のよき理解者でもあった。

大筋では間違いはないものの、細かいところで訂正を要するところがある。たとえば出身地を宇和島としているが、厳密には「愛媛県北宇和郡岩淵村」である。また、東大は芥川龍之介は英文科、藤岡蔵六は哲学科である。つまり右の文章は、かなりおおざっぱな紹介にすぎない。

ところで、本書が出てしばらくして、刊行元の大修館書店に藤岡和賀夫という読者の方から便りと、藤岡蔵六著『父と子』[5]の「文科一年乙類」をはじめとする幾つかの章のコピーが届いた。大修館書店から回ってきた便りと資料を見てわたしは驚いた。コピーには芥川との交流や寄宿生活が細かに書かれ、芥川評伝のよき資料が随所に見出されたからである。藤岡和賀夫氏は蔵六の三男であった。わたしはすぐに礼状を認め、『父と子』を見せて欲しいと言い添えた。この要望に和賀夫氏は、早速応えて、まずその本を貸して下さり、兄に問い合せるなら残部があるかも知れないと伝えてくれた。

『父と子』を立派な私家版の書物にして刊行されたのは、藤岡蔵六の長男藤岡眞佐夫氏であった。読者の中には、この名を記憶されている方もいよう。そう、藤岡眞佐夫氏は、かつてアジア開発銀行の第四代総裁をなされ方である。著書に『アジア開銀総裁日記』[6]その他がある。わたしは和賀夫氏に教えてもらった藤岡眞佐夫氏の住所宛に丁重な便りを出し、私家版『父と子』の余分があったらお譲り頂きたいと申し出た。眞佐夫氏はすぐ承知してくれた上、父について知ってい

ることをお話したいと言い添えた返事をくださった。その後何度かの書信の往復の後、東京霞ヶ関の東京倶楽部で藤岡眞佐夫氏とはじめてお会いしたのは、一九九三（平成五）年十二月十六日のことである。

この日以来、わたしは藤岡眞佐夫氏から藤岡蔵六にかかわるさまざまの資料や情報を得ることになる。中には井川恭宛の藤岡蔵六書簡二通や蔵六・春叢（蔵六の父）関係の戸籍、それに蔵六自筆の履歴書などもある。いずれも貴重なもので遺族の協力なしには手に入らない資料である。数少ない藤岡蔵六参考文献の一つである野田弥三郎「薄幸の哲学者：藤岡蔵六さんを偲ぶ」[7]のコピーもいただいた。『出隆自伝』[8]に「藤岡事件とその周辺」の章があるのを知ったのも、眞佐夫氏を通してのことだ。こうしてわたしの中に、藤岡蔵六という人物のプロフィールが次第に形成される。芥川のいう「損をした男」の生涯が、ここに大きくクローズアップされてきたのである。

藤岡眞佐夫氏は、近年『父母の思い出とともに』[9]を出された。この本の「一　父と母」には、息子から見た父蔵六や母清恵のことが、かなりくわしく描かれている。中に「父は郷里宇和島をこよなく愛した」の一文もある。また巻末には「藤岡蔵六略歴」が付されている。わたしはこの本をいただいて、ようやく藤岡蔵六研究の時が訪れたことを実感した。わたしはその生い立ちの地に行き、取材をする必要を強く感じ出したのである。藤岡蔵六の出身地宇和島・津島地方は、わたしにとってはじめての地である。幸い愛媛大学法文学部教授であり、わたしの親しい友人の大西貢が案内をしてくれることになった。藤岡蔵六への旅がこうして持たれることとなる。一九九八（平成一〇）年春のことであった。以下にまずは現地調査を踏まえての家系と生い立ちを記そう。

二　父母と家系

藤岡蔵六は一八九一（明治二四）年二月十四日、愛媛県北宇和郡岩淵村に生まれた。『父と子』には、「伊豫国宇和島市の南方三里、岩松川の中流に深い淵があって、其処に幾つかの大きな岩が聳えて居る。岩淵と言う村の名は是れに基いたものらしい。村は人家凡そ

百軒、其一番東の端の家で私は生れた。父は春叢、母は要子と言った」とある。父母の生年月日を戸籍で見ると、父春叢は天保十年（一八三九）七月六日生まれ、母ヨウは安政三（一八五六）年十二月六日の生まれとなっている。

岩淵村は清満村を経て、一九五五（昭和三〇）年二月十一日の町村合併で、津島町の一部となった。愛媛県北宇和郡の南西部に位置し、東部には四国山脈に連なる山々がそびえ、西部は宇和海に面し、変化に富んだリアス式海岸がある。町の中央を岩松川がゆったりと流れる。水量は豊かで、水は澄んでいる。かつて獅子文六は、この町を舞台とした小説『てんやわんや』[10]を書き、岩松川に沿った集落を「一筋の河が野の中を紆（めぐ）り、河下に二本の橋があり、その片側に銀の鱗を並べたように人家の屋根が連なっていた。いかにもそれは別天地であった」と書いたが、その面影はいまもって変わらない。山と川と海の自然に恵まれた地である。

藤岡家の祖先は、奥州仙台の出である。『父と子』によると、宇和島の藩祖伊達秀宗が仙台の伊達家から分封された時、お供をして移り住み、のち理由は定かでないものの、藩士をやめて藤岡姓を名乗るようになった時、「武士の子だから百姓にするのは不憫だと言うので医者にした」とある。松山に住む藤岡一族の藤岡喜六が、「藤岡家一族家系図」[11]を作成していて参考になる。祖父元甫は、漢方の二代目の医者であった。冒頭に引いた芥川龍之介の文章に、「藤岡の祖父に当る人は川ばたに蹲まれる乞食を見、さぞ寒からうと思ひし余り、自分も襦袢一枚になりて厳冬の縁側に座り込みし為、とうとう風を引いて死にたりと言へば、先祖代々猛烈なる理想主義者と心得べし」とあったが、それが元甫である。藤岡蔵六はこの逸話を『父と子』に記しており、「此風変りな、一寸聞くと如何にも馬鹿気た祖父の行為の奥に、人を憐む思い遣りの情が潜んで居て、其の温い血管は直ちに父の心の中にも伝って居た。父は口癖の様に、「医は仁術なり」と言って居たが、自分でそれを厳格に実行した」とのコメントを添えている。

父の春叢は、元甫の長男であった。医者三代に当たる。幼年のころから宇和島藩の御殿医富澤大眠の許で皇漢方の修業をし、同時に儒学も学んだ。成人後、富澤に随行し、藩主の御座船に乗って江戸へ行く。三年

後藩主とともに大阪まで帰り、許しを得て二年ほど修業する。『父と子』によると、大阪では大井卜新という皇漢方の大家から医術を、篠崎小竹の門弟から儒学を学んだという。宇和島に帰ってからは、富澤大眠の下で代診を勤めていたものの、維新前夜から西洋医学に目覚め、勉学の念やみがたく、今度は私費で、東京と変わって間もない旧江戸へと三百里の道を高下駄を二足すり潰して出かける。

以下は藤岡眞佐夫『父母の思い出とともに』の記述に拠るところが大きいが、東京に着いた春叢は、官立の医学校（東京帝国大学医科大学の前身）に入る。そこでは西洋医学が教えられ、内科・外科の区別もなく、臨床医学そのものを学んだという。同級生には長与専斎・高峰譲吉らがいた。医学校を卒業した春叢は、郷里の岩淵村で開業医としてのスタートを切る。岩淵村を含めた一帯、現在の津島町に相当する地域を当時津島郷と称したが、藤岡春叢の評判は津島郷に鳴り響き、遠方からの往診の依頼も珍しくはなかった。彼は山奥まで苦にせず往診した。元来丈夫で体力があり、船酔い駕籠酔いもしたことのなかった春叢は、困難な開業医生活をよくこなした。「医は仁術なり」を信条とする彼は、貧者からは金をとらず、逆に見舞いをするなどして、世の尊敬を集めた。

『父と子』には、村中で一番貧乏な家へ診察に行き、余りに貧しいのに驚き、帰宅するや妻のヨウに白米一斗と梅干一樽を届けさせたとか、白米飯に肉や魚を添えて食べていながら、決して治療費を払わない馬喰の金さんの家にも、夜遅く診察の依頼があると一文にもならないことを承知しながら出掛けたとかいうエピソードが記されている。今回取材で津島町を訪れたが、春叢の評判は平成の今日まで、一部年配者に記憶されているほどである。例えば遠縁にあたる藤岡とよ（八二）は、貧しい人からは金を取らずに診察した人だと聞いていたと証言し、現町長の岩城忠（七六）は、伝聞をもとに、医者としてのみならず、人々の話をよく聞いて相談に乗った情の厚い人としての春叢を語り、地域の人から仏のような人として尊敬された人だったことを力説する。

春叢は父元甫に似て、同情心に富んでいた。『父と子』の「五三　積善の家」の章には、ある早春の肌寒い日、

春叢は宇和島中学校の生徒数名が岩淵の川原へ来て野宿しているという話を聞いて、「この薄ら寒いのに野宿をさせては可愛想だ、宅で泊めて上げるから行って呼んで来なさい」と言い、家に泊め、夕食まで振る舞ったという話が出てくる。

藤岡春叢は正直で、誠実であったが、社交は下手だった。『父と子』に蔵六は春叢を評し、「父の字引には社交と言う文字は無かったらしい。そんなことはてんで頭から問題にしなかった。直言経行、それは父の言行の全貌であった。他人がそれに由ってどんな感じを受けようと、それに対してどんな解釈をしようと、夫れは彼等の勝手である、わしはわしの正しいと信ずることを言い且つ行う丈けであると言うのが父の生活態度であった」と書き留めている。これは春叢の生活哲学であったばかりでなく、子どもたちの教育にもかかわっていた。後年の蔵六の社交べた、世間知らずの頑固一徹さは、父藤岡春叢の性格とその教育の反映とも取れるのである。藤岡蔵六の悲劇は、一代にして成ったものではなく、祖父元甫、父春叢のものでもあったのだ。

春叢、ヨウ夫婦の結婚は、一八七二（明治五）年のことで、春叢三十三歳、ヨウ十六歳、二人の年齢差は何と十七である。ヨウは岩淵村のさらに東の山財村の大加田伝八の次女である。勉学一筋だった春叢は、晩婚であった。が、二人の間には、次々に子が生まれた。長男初見、長女マルイ、次女シガ、三女キイ、それに次男の蔵六、三男甫である。長男初見は早く六歳で没している。戸籍には初見の名はないが、没年は長女マルイ（真留意）の生まれる二年前の一八七九（明治一二）年のことのようだ。蔵六が生まれるはるか以前のことである。

初見に関しては、『父と子』の「一三　神童の兄さん」の項に出てくる。そこには「数え年四才の時、父が百人一首の本を買って与えたところ、百種の和歌を全部暗唱してしまった。五才の春になると、歌人の肖像絵を隠して唯だ其の冠と下の敷物とを見せた丈けで、歌人の名と其歌詞とを言い当てた。下の句一つ言えば其の上の句と其作者と、其人がどう言う服装をして居たかを残らず述べた。一口に言えば、百人一首の本を完全に我物としてしまったのである」とあるように、「生

れ乍らの天才」であったようだ。それだけに父母の落胆は大きかった。

愛児を失った春叢、ヨウ夫婦は、悲しみを転地で癒そうと高知県宿毛町に転居している。県は違うが、宿毛は隣町のようなものである。一時は土佐の政治家林有造に従って、北海道まで行こうとしたが、老母シカのことを考えて断念したという。宿毛に一年ほどいた春叢夫婦は、郷里に戻り宇和島で開業医をはじめる。宇和島の知人たちの春叢を田舎に燻らせておくのは気の毒だとして、城下町の宇和島へ出るようにと勧めてくれたのに従ったのである。長女のマルイが生まれるのは、帰郷して間もない一八八一（明治一四）年九月十二日のことである。続いて次女のシガ（滋賀）が一八八四（明治一七）年三月六日に生まれている。

数年間宇和島の広小路通りで開業医を続けた春叢は、次に紀州加太浦へ移り開業する。蔵六は一家がなぜ紀州へ行ったのか分からないとしている。加太浦滞在中に三女キイ（紀伊）が生まれる。一八八八（明治二一）年二月九日のことである。紀州生活は春叢一家にとって好ましいものだったが、郷里の母シカのたっての願いで、郷里の岩淵村へ帰ることになる。

三　出生と生い立ち

藤岡蔵六が生まれたのは、前述のように一八九一（明治二四）年二月十四日のことである。春叢一家が岩淵村へ帰って来て間もない日のことであった。母と妻、それに娘三人のにぎやかで華かな一家に、男の子が誕生したのである。春叢五十二歳の春のことだ。妻のヨウが夫に喜んでもらえると思って、「やつと男の子が生れました」と告げたところ、春叢はただ一言「もう遅い」と言ったという。

人生五十年と言われた時代のことである。長男を病気で失っていたから、男子の出生はうれしくないことはなかったはずだが、年齢を考えると確かに「もう遅い」と春叢が言ったのも、わからないではない。蔵六という名は、『父と子』に「世俗の諺に、「鶴は千年亀は万年」と言って、亀は最も長命だとされて居る。併し亀と言う文字を其まま名前に現わすのは拙い。亀は其頭尾と四肢とを己が甲羅の中に収蔵するので、「蔵

六」とも呼ばれる。宜し、此名を付けようと父は考えて、私に蔵六と言う名を付けた」とある。蔵六の名を冠した人物に、宇和島藩で蘭書の翻訳や軍艦製造などを指導した軍師村田蔵六がいる。父は村田蔵六のことを折りに触れて彼に語った。

蔵六は亡くなった兄初見が四歳の時に百首の歌を暗唱したのに対し、五歳になっても碌に覚えられなかった。そのため父春叢には、愚鈍な子として写った。彼は父に認めてもらいたくて、小学校時代から自ら努力主義と名付けるやりかたで熱心に勉強した。彼の入った小学校は、川向こうの岩淵尋常小学校であった。現在の清満小学校の前身である。清満小学校の『学校要覧　平成十年度』の「沿革の概要」によると、岩淵尋常小学校の開校は一八七六（明治九）年三月となっている。蔵六の入学したのは、一八九六（明治二九）年四月なので、学校創立二十年後のことである。数え六歳（満五歳）の入学だった。同年齢の者より早い入学であった。高等科は病気をしたこともあって四年を費し、計八年を初等教育に当てたことになる。

岩淵尋常小学校の二年生の時、父春叢は岩淵村の中心の大通りに面した所に土地を買って家を新築した。現在の郵便局のあたりという。木造二階建で一階は七室と土間が三つ、二階は総二階のため広く、養蚕室にも用いられた。男の子一人の家に育った彼は、父母と姉たちに可愛がれ、幼少年時代を過ごす。寝る前には長姉か次姉の朗読を聴いた。村井弦斎や村上浪六や徳冨蘆花の作品が多く、次いで紅葉・一葉・鏡花などであった。渡辺霞亭の歴史小説も交じっていた。蘆花の『不如帰』を聴いた時には皆が泣いたという。

岩淵村の山裾に臨済宗妙信寺派の満願寺という由緒ある寺があった。境内に薬師堂があり、薬師如来が安置されていた。霊験あらかたというので、参詣人が絶えなかった。少し離れたところに大師堂があり、弘法大師お手植えとされる柿が今もある。実の中にもう一つの柿が入っているという珍しいものだ。今日は二重柿という名で知られ、津島町の観光パンフレットにも載っている。当時は大師柿と呼ばれていた。その形態から子宝の霊験があるとされる。もともとは渋柿なので、その干柿が縁起物として全国から引き合いが絶えないという、ちなみに現在は県指定の天然記念物に

なっており、津島町の町章は、この柿を図案化したものである。蔵六はこの境内でよく遊んだ。

寺では二月の涅槃（ねはん）には、本堂の壁に「涅槃図」と「地獄極楽の絵」の掛物を掛けるのが常であった。涅槃図は入滅した釈迦を囲んで諸仏諸菩薩が嘆き悲しみ、禽獣まで来り集って悲しみを共にしている様子が描かれたものである。一方、「地獄極楽の絵」は、半面に相好円満な仏が可愛い子どもたちと楽しそうに遊び、他の半面には怖い顔をした赤鬼青鬼が娑婆で悪事を働いた人間どもを打ちのめしている様子が描かれている。釜茹での場面もある。満願寺には今もこの二つの掛物が残っていて見ることができる。少年藤岡蔵六はこれらの掛物にじっと目を凝らす。そして釈迦の偉さと、極楽と地獄の相違の激しさに驚くのであった。後年蔵六は『父と子』に、「此の二つの絵図は、私に取って忘れ難いものであって、私の精神史上に可なり大きな役割を演じた」と書くことになる。

尋常小学校時代、蔵六は父春叢から儒教の教えを学んでいる。父は子に「四端の説」など、かなり高度の内容を教えた。「惻隠の心は仁の端なり」という句などは、幼い彼の頭に染み込んだという。父は孟子の唱えた「浩然の気」について、しばしば彼に語った。藤岡家には木版刷りの大きな四書五経があった。中学に入って漢文を習うようになってからは、時々それを出して読んでいる。儒教は藤岡蔵六の精神的バックボーンの一つとなっていく。

一九〇〇（明治三三）年三月、藤岡蔵六は岩淵尋常小学校を卒業、四月、岩松町にあった津島高等小学校に入学した。岩淵の家から岩松の学校までは約四キロ、彼は弁当をもって通学した。津島高等小学校の当時の校長は兵藤賢一、教頭は富永寅吉であった。二人とも優秀な教育者であり、その感化を受けて蔵六の生活は一変した。彼は自身の魯鈍さを意識し、本気になって勉強をはじめたのである。それには規則正しい生活が必要だと、彼は日課表を作り、それに従って行動した。またこの頃から日記を付けはじめている。当時の読書は、雑誌は月刊の『少年世界』であり、書物はイギリス人スマイルズ原作の訳書『西国立志篇』[12]であった。教頭の富永には国語や修身を習っている。ある時修身の時間に、富永は生徒に「人生の目的は何か」と問い

かけた。多くの生徒は大臣や大将や金持ちになることだと答えた中で、蔵六は「人生の目的は自分の心の満足を得ることであります」と答え、富永から「それは好い答えです」と言われたという。彼は「これは私が意識的に試みた最初の哲学的思索であり、且つ其解答であった」（『父と子』五六）と記している。

三年生の秋頃、彼は体調をこわし、学校に行けなくなる。どこが悪いというのでもなく、ただ体がだるいのである。神経的な病であったのであろう。心身の過労からきたものと考えるのがよいようだ。当人もそのことを言い、「当時私は余りにも自己に対し厳格であった。生一本の真面目さを以て、自己を反省し、自分の心を鞭打ち、少しでも善くなり向上するよう努力した。寸暇を惜んで勉強すると共に、自分の体力の許す限り仕事をし家事の手伝いをした。幼年時代の娯楽は去って、自律と反省と努力の生活のみが続いた。斯う言う生活振りは弱小な私の心身を過労させた」（『父と子』五八）ともいう。

高等小学校を四年かけて蔵六は終了した。もっとも先述のように、数え六歳で入学しているから、他の生徒に遅れをとってはいない。二度目の三年級は校長の兵藤賢一がクラス担任である。兵藤は小柄で丸顔の髭を生やした才気走った教師であった。歴史の時間に鳥居元忠が伏見城に立籠って、孤軍奮闘、主君のために死んだ話をしてくれた時、蔵六はすっかり感激して、概略を一文に綴り提出する。兵藤は大変ほめた上で、清書をさせ、当時宇和島で刊行されていた『南豫時事新報』に持ち込み、掲載に漕ぎ着けたという（『父と子』五九）。蔵六のはじめて活字になった作品である。今回の宇和島・津島方面への取材の際、わたしは大西貢に案内されて、宇和島市立図書館を訪ね、『南豫時事新報』の所在を問い合わせたが、明治期のものは遺憾ながら収蔵していないとのことであった。

四　宇和島中学校

一九〇四（明治三七）年三月に津島高等小学校を終えた藤岡蔵六は、四月六日、愛媛県立宇和島中学校（現、宇和島東高等学校）に入学した。彼は父母の下を離れて、十二キロほど離れた町で下宿生活をするようになる。

宇和島は幕末までの旧藩時代、伊達家十万石の城下町であった。町の中央に城山があり、三層の白亜の天守閣がそびえている。町はこの宇和島城を中心に展開している。東・南方に旧市街地が広がり、西は宇和島湾で、北は干拓地上に新市街があり、八幡浜につながる県道が伸びる。蔵六がやって来た頃の宇和島の中心地区は、『父と子』に次のように記されている。

町の西方は宇和島湾で、湾の入口に九島と言う島があって、天然の防波堤を成して居る。大阪航路、豊後航路の汽船が毎日出入する。北方は吉田を経て八幡浜へ、南方は岩松を経て御庄へ通ずる県道が開けている。町の周辺には、伊達家の菩提寺たる金剛山、龍華寺をはじめ数多の寺院があり、町の中には、メソヂスト教会と組合教会とがあった。中学校、女学校、区裁判所、郡役所等もあった。街には、堀端、追手通り、丸之内など城に因んだ名前が多い。丸之内には、昔ながらの厳めしい門構えをした家老屋敷も残って居た。春、藤の花時には、伊達家の庭園「天赦園」が一般公衆のために開放された。紫と白の藤の蔦が池の周囲に美しく咲いた。私の中学時代には無かったが、其後伊達家図書館なるものが開設された。

ところで、宇和島中学校は歴史のある学校である。一九九六（平成八）年十月一日、同校は開校百二十年、創立百周年を記念してＡ５判、六二二ページの『宇和島高等学校沿革史』（沿革史編集委員会、責任者井上正文）を刊行している。それによれば、同校が愛媛県尋常中学校南予分校として設立されるのは、一八九六（明治二九）年四月一日であるが、前史をたどると、南豫変則中学校や私立宇和島明倫館、さらには旧藩時代の内徳館までさかのぼることができる。

旧宇和島藩は幕末の藩主伊達宗城が英主であり、教育を重んじた。先にちょっとふれた長州の百姓階級出の村田蔵六を取り立て、藩士の資格を与え、海軍関係の蘭書の翻訳や蒸気船（軍艦）製造に当たらせたのも宗城であった。村田蔵六は、後年倒幕軍の総司令官となった大村益次郎である。宇和島は小藩ながら海山の幸に恵まれ、人々は温和であり、幕末の藩主は進取の

精神に満ちた人であった。それは宇和島中学校の校風にも引き継がれていた。

藤岡蔵六が通った頃の宇和島中学校は、鶴島城（宇和島城）のお濠の側に位置した。蔵六が入学した一九〇四（明治三七）年は学校設立九年目に当たった。『沿革史』によると、この年の入学生は一〇四名で、校長は東京帝国大学文科大学を出た松村伝である。学校は発展途上にあり、宇和四郡の秀才を集めていた。一年から四年まで各学年二組編成で英才教育がなされた。日清戦争後の国威発揚の時代状況の中で、政府は人づくりに力を入れていたが、その余波は、四国のこの小さな町の中学校にも及んでいたのである。同級生に「岡野留尾と言う素的な秀才」（『父と子』）がおり、蔵六は岡野を目標にして勉強に励んだ。

宇和島中学校時代の藤岡蔵六は、無口で変わり者と見なされた少年であった。馬鹿正直という面もあったようだ。体操の時間に軍人教師の竹宮少尉から不動の姿勢を習い、「一旦不動の姿勢を取った以上、蜂が留っても手を動かしてはいかん」と言われ、その通り実行するとか、少尉が校長に呼ばれ「休め」の号令をかけて出て行った後、授業の終わりを知らせるラッパが鳴ると、他の生徒は解散したのに、一人立ち尽くすといった融通の利かない面があった。「無口な変わり者」が宇和島中学入学の頃の蔵六の姿であった。

学校では弁論部に所属した。一年級代表の弁士になった時、彼は津島高等小学校の恩師兵藤がスローガンとしていた「今日も今日もと働け」を思い出し、それを演題にして演壇に立ったところ、好評を得、『校友会雑誌』で褒められたという。宇和島は南国で海とともにある。九月初めの南豫は、まだ暑いので学校では午後は水泳に当てていた。蔵六は泳ぎが好きで、遠泳試験にも苦もなく合格した。泳法は観海流といって波の静かな宇和島湾を泳ぐには適していた。宇和島中学校にはボートが二隻あり、希望者に貸してくれたので、蔵六はその稽古をはじめ、湾内をこぎ回っている。他に運動は、テニスと剣道を好んだ。入学したころの蔵六は健康そのもので、今日宇和島東高校に残っている記録には、第一学年終了の一九〇五（明治三八）年三月には「精勤ニ付褒状附与」、翌年三月には「学業操行共抜群及精勤ニ付褒状附与」の記事を賞罰欄に見出す

ことができる。

中学校に入った彼は、小学校以来書き続けた日記に加えて「反省録」というものを記録しはじめた。「勤勉」とか「忍耐」とか「寛容」といった、自分が修養しなければならないと思う幾つかの徳目を選び、毎夜厳格な評価を出し、一週間分を表にしたものである。彼はそれを中学五年間毎日欠かさず実行したというから大したものである。『父と子』に彼は、「後年私は此反省録を見る度に、若き日の自己の姿に接する様な気がして微笑ましく感じたと共に、何故か知らぬが我れ識らず熱い涙の滲み出るのを覚えた」と記す。一年生の二学期には、校内にあった寄宿舎に入っている。『三国志』に熱中し、押川春浪の『海底軍艦』[13]などを読むのは、この寄宿舎時代のことである。寄宿舎は彼には向かなかったらしく、学期を終えると、またもとの下宿に戻っている。

藤岡蔵六の宇和島中学校時代を調べていて特に目につくのは、キリスト教との邂逅である。『父と子』には、「三年生の時私は初めて宇和島町内に在る基督教の教会へ行って見た。メソジスト教会で米国の宣教師ターナーさんが主宰していた」とある。

藤岡蔵六の出席した教会は、日本メソジスト宇和島教会（現、日本基督教団宇和島中町教会）である。宇和島には十七世紀に切支丹の存在が確認されており、明治になるとカトリック、それにプロテスタントの諸宗派が活発な伝道をはじめるようになる。『日本キリスト教歴史大事典』[14]によると、宇和島美以教会（日本メソジスト宇和島教会）は一八八七（明治二〇）年宇和島を訪れたJ・W・ランバス、W・R・ランバス親子らの働きによって、同年九月設立されたことにはじまるとある。

日本基督教団宇和島中町教会は、一九九七年九月二十五日、創立百十周年を迎え、『宇和島中町教会百年史』（以下『百年史』と略称する）を刊行している。わたしはこの教会を訪れ、幸いにも『百年史』を手にすることができた。『百年史』によると、ジェームズ・ウィリアム・ランバスは、ミシシッピー大学で医学と法律を学び、中国伝道の召命を確信して二十七歳の時極東へ船出し、上海を中心に伝道に従事する。その間に息子ウォルター・ラッセル・ランバスが生まれた。ウォルターは十四歳の時、健康を損ない単身アメリカに帰国、

ヴァンダビルシト大学で神学と医学を修め、両親のいる東洋での伝道を決意する。ウォルターは約十年、中国で医療伝道に携っている。

中国にいたランバス親子が監督から日本伝道の任命を受けたのは、一八八六（明治一九）年のことである。翌年五月、宇和島にやって来た父のJ・W・ランバスは居村旅館で聖書講義を行い、やがて九月には子のW・R・ランバスも来て、ここに宇和島メソジスト教会が設立されるのであった。『百年史』によると、現在の宇和島中町教会の所在地、中ノ町八番地に三一一坪の土地を購入したのが一八九四（明治二七）年、教会堂が建つのは一八九六（明治二九）年九月二十日のことである。

さて、藤岡蔵六が日本メソジスト宇和島教会に出席したのは、宇和島中学校三年生の時であり、宣教師W・P・ターナーの時代であった。それまで儒教や仏教の環境下にあった蔵六が、キリスト教の教会を訪れたのは、一つには時代的なものがあり、二つには何かを求めてやまない彼の精神がしからしめたものである。のち一高時代に友人となり、卒業前の一学期には、小石川区上富坂の日独学館で一つの部屋に寝起きするようになる井川恭も、この少し前に日本聖公会松江基督教会の牧師オリバー・ナイトの自宅で、毎週金曜日に行われていたバイブルクラスに出席し、やがて教会にも通うようになる。井川の場合は義兄の死がきっかけとなっての教会出席であった。一高時代の友人長崎太郎もまた、この頃高知県安芸町の日本基督教会安芸教会に出席していた。中学時代のキリスト教との出会いは、彼らにとってきわめて重い意味をもつ。

藤岡蔵六は、「私は初めの程ただ物珍らしさに惹き付けられて教会へ行っていたが、次第に教義の内容が解るに連れ、彼等の説く神と其愛と言う事が私の心を惹き付けるようになった」と言う。そして聖書を熱心に読む。「聖書を知ってからの私は、思想の深みを増すと共に心の悩みをも増した」とも彼は『父と子』に記している。『父と子』には「ターナーさん」の章がある。ターナーさんとは、日本メソジスト宇和島教会の宣教師W・P・ターナーのことである。「ターナーさんは、背の高い、何処かリンカーンを思わせる様な風采の人であった。中学生のために、一週に一度自宅で英語の

聖書を講読されたので私も参集した。参会者は大抵五六名あった」と彼は言い、パーティーに招待され、はじめて洋食を食べたことを記している。

『宇和島中町教会百年史』によると、W・P・ターナーの着任は、一八九七（明治三〇）年二月二十八日のことである。ターナーはアメリカのジョージア州の生まれ。エモリー大学を卒業し、一八九一（明治二四）年YMCAの教師として来日、二年間公立学校で英語を教えた後、アメリカ南メソジスト監督教会の伝道団体に加入し、関西学院などで神学を講義した。一時帰国して、アリス・バークと結婚、宇和島に赴任したのである。ターナーは日曜学校や青年の教育に力を尽くしたとされる。英語講読は夫人のアリス・ターナーが代わってすることもあった。「発音がきれいで、実際に「玉を転がす」様な感じを与えた」とは、藤岡蔵六の感想である。

四年生の時から、蔵六は校友会文芸部（弁論部と雑誌部を含む）の委員になった。五年生の時には「日之出会」という組織を作り、全学年から同志を募って月一回の回覧雑誌『日之出』をはじめている。例の秀才岡野留尾が毎号表紙に美しい水彩画を描いたという。剣道は一年生の時からずっと続けており、五年生の時には剣道部の副将になっている。

一九〇九（明治四二）年三月、藤岡蔵六は宇和島中学校を卒業した。第九回の卒業であり、四十一名の名を同窓会名簿で確認できる。「中学五年間は私の修養時代であった。克己に明け反省に暮れた」と蔵六は言う。同級生の多くは高等学校に進学した。が、蔵六は卒業を前にして健康を害していた。背中が痛むのであった。医者であった父春叢は、脊髄カリエスではないかと心配し、結婚して大阪に住む姉のキイ（紀伊）の家に行かせ、阪神の大病院で見てもらうことになる。蔵六は大阪の病院や京都の大学病院で診察を受けたが、脊椎に異常があるようだというほかは、はっきりしたことはわからなかった。明石にも一週間ほど滞在し、その地の名医だとされる人に見てもらったものの、はっきりしない。明石は詩歌にうたわれるだけの地で、素晴らしい景観が心をとらえ、「明石滞在は私の療養生活中の一番楽しい思出となった」と、後年彼は記すこととなる。

藤岡蔵六が一高受験を思い立つのは、療養生活中のことである。医者の息子なので、普通ならば、他の同級生の二、三が進学した岡山医専あたりに行くのが妥当な線だが、蔵六はあえて東京の第一高等学校の文科を志望した。彼は宇和島に下宿して、受験勉強に励んだ。尾崎紅葉の『金色夜叉』や『樗牛全集』に読み浸るのは、受験勉強に励んだ浪人時代のことである。『樗牛全集』は、一年上の文芸部委員河野栄太郎から借りた。「滝口入道」を読み、「平家雑感」に強く引かれた。この頃の彼の哲学的感想が『父と子』に次のように記されている

樗牛の論文集の中に、「死と永世」と言う一文があった。私は聖書を読み始めてから「限り無き生命」と言うことを重大な問題としていたので、此論文を興味深く読んで見たが、人は其事業によって永遠に生きると言う彼の論旨は確かに一見識ではあるがまだ何となく物足りない様に感じた。基督教流に、神の信仰に入った者は限り無き生命を得ると言う考方の方がもっと深味があるように思われた。尤も樗牛自身晩年は日蓮信仰に入ったので、彼も亦信仰的永生を得たと推察出来るが、私は基督教にも日蓮にも入れない、それなら一体どうすれば私の様な人間は永生を得ることが出来るか――是れは私自身に取って深刻な重大問題である。私は精一杯考えて見たが分らないので、それを自分の魂の懸案として残して置いた。

五　第一高等学校

一九一〇（明治四三）年七月、藤岡蔵六は第一高等学校（略称一高）受験のために上京した。試験前数日のことで、十一日からはじまった五日間の試験に臨む。志望は第一部乙類の文科であった。この年の一高文科の入学試験は、新しく無試験検定試験が導入されたことと、岩元禎のドイツ語の試験に前年入学の十二名が落第していたこともあって、試験入学ワクは二十名ほどきりなく、かなりの激戦であった。が、彼はすれすれながら何とか合格することができた。

『官報』第八一三七号（明治四十三年八月五日）の学事

欄に、「入学許可　第一高等学校ニ於テ来ル九月十一日ヨリ大学予科ニ入学ヲ許可スヘキ者ノ族籍氏名左ノ如シ」（文部省）」との記事がある。成績順に合格者を公表しているのである。これによると、無試験合格者は八名、試験合格者二十一名である。無試験合格者は、成績順に長崎太郎・鎌田寅治・石原登・芥川龍之介・佐野文夫・小来栖国道・根本剛・久米正雄である。試験入学者二十一名中の主な者は、四番に菊池寛、五番に石田幹之助、七番に井川（のち恒藤）恭、八番に松岡善譲（のち「譲」一字に改名）、九番に長谷川四郎、十四番に鈴木智一郎、十八番に五十嵐小太郎、そして蔵六は終わりから二番目の二十番目の合格者であった。愛媛県の片田舎から試験の数日前に上京し、準備不足を覚悟で試験を受けたのだから、この成績も当然である。むしろ、よくぞ合格したというべきか。もともと蔵六はガリ勉タイプの学生ではなく、読書好きの学生であった。それでも成績は次第に向上し、卒業時には第一部文科二十六名中十八番[15]であり、進学した東京帝国大学哲学科哲学専修卒業時には、なんと首席[16]である。

一年三之組英文科には、他に岩元禎のドイツ語を落として留年となった土屋文明・宮本覚純・加藤正義・谷森饒男・山本勇造（有三）らがいた。また、補欠合格に成瀬正一がいた。多くは後年文学や教育の分野で名を成し、文筆で知られた存在となる。田舎出の蔵六が彼らに混じって自治寮で生活するのは、当初はなかなか厳しかったに相違ない。この非社交家の男が心を許してつき合ったのは、井川恭と芥川龍之介と長崎太郎であった。『父と子』の「九二　文科一年乙類」には、次のようにある。

> 私は第一高等学校文科一年乙類の一生徒となった。此級（クラス）に島根県出身の恒藤恭（当時井川恭）と言う秀才が居て、寄宿寮も私と同じ南寮だったので、何時の間にか親しく話をするようになった。また生粋の江戸児で、芥川龍之介と言うスマートな青年が居たが、彼はどう言う訳か私に近付いて来て、「一度僕の宅へ遊びに来給え」と言うので行って見た。当時彼の家は新宿に在って搾乳業を営んでいた。二階へ通されて搾り立ての牛乳を御馳走になった。其時二人は何を話したか忘れてしま

ったが、田舎弁の私が東京弁に魅了され乍ら話したこと丈を覚えている。私は多士済々たる文一乙の中でも図抜けてよく出来た是等二秀才と親交するようになったことを喜んだ。また入学当時首席を占めて居た高知県出身の長崎太郎と言う青年とも近付きになった。私は豫てから土佐人に好感を有ち、一度親しく交際して見度いと思って居たので、今その機会を得たことを喜んだ。

井川恭とは二年生になって、より親しく交わりをもつようになり、休日には一緒に東京中を歩き回ったりしている。[17] 一高最後の学期には、小石川区上富坂に新築落成した日独学館で同室で過ごし、大きな感化を受けることになる。そのことは後でふれることにする。また芥川龍之介とは、入学当初から知り合い、それは二年生になって中寮三番、さらに編成替えで移った北寮四番での生活を通し、いっそう親しくなる。長崎太郎は、入学した年の十二月のクリスマスに市ヶ谷教会で受洗しており、熱心なクリスチャンであった。蔵六は「豫てから土佐人に好感を有ち、一度親しく交際して見度いと思って居た」だけに、長崎太郎とも交流を結んだのであった。

藤岡蔵六の一高時代は、それなりに充実していた。『父と子』の「九五　一高生活の態度と方法」の章には、彼の当時の生活哲学が述べられていて参考になる。それによると自由な一高の生活を楽しみ、他の級友の生活に流されない内容重視の生活を目指したという。学科は英語とドイツ語に多くの時間が当てられたが、蔵六は「私は外国語の習得は必要なる原書を読むための手段であると考えたので、之に主力を注ぐ気にはなれなかった」と言う。そのため学科の成績は振るわなかった。「私は蝋勉（筆者注、消灯後ろうそくを灯して勉強すること）してまで一点でも多く取り度いとは毛頭思わなかった」とも言う。彼は読書と名士の講演を好んだ。そのため自分の中に引き籠もることが多くなる。いかにも藤岡蔵六らしい回想の文章を、「一高生活の態度と方法」から引用しよう。

外面的に華やかな生活をするよりも、内面的に沈潜して行こう――これが私が一高入学と共に考

え付いた生活態度であった。自己を掘り下げて行くこと、そうして確かりした自己の根底を築くこと――これが高校三年間の私の任務である。真善美に対する憧憬と熱情とを深く内に蔵して、ただ平凡な単純な一生徒として暮そう。校内の総ての公的機関から遠ざかり、自己に沈潜し自己を育成しよう、其為めに私は他から存在をさえ認められないほど影の薄い人間になっても構わぬ、他に見せる為に学問し修養するのではないから、と言うのが私の執った生活態度であった。芥川のような眼光の鋭い友人だけが、私の内部を洞見して其存在を認めてくれた。

一高の中寮三番で同室だった成瀬正一の「日記」（「成瀬日記」）には、当時の藤岡を評して「伊予の人だ。矢張り真面目な人だ。中々の勉強家だ。静座法に熱心な人だ。哲学をやる由だ」とある。短評ながら要を得た人物評である。ここに見られるように、一高時代の蔵六は静座法に熱心であった。彼の取り組んだのは、岡田虎次郎が創始した岡田式静座法であった。練習は毎朝日暮里の寺で三十分から一時間行われた。『父と子』には『岡田式静座法』の一章もある。蔵六はそこに「此静座法は何となく自分の性格に適したように思われたので私は熱心に修行した。そのお陰かどうかはっきりとは言えぬが、病後の私の健康はすっかり回復して、寒い東京の冬にも感冒一つひかず、滅多に足袋も穿かないで過すことが出来た」と書いている。

一高時代の藤岡蔵六は、求道の固まりであった。彼は何物かを求めてやまないのである。ある時は、海老名弾正の牧会する本郷教会（本郷弓町教会）に説教を聴きにに行き、その「熱烈な信仰と高潔な人格とから自然に迸り出る魂の雄弁」にひきつけられ、また、ある時は、近角常観の主宰する求道学舎に話を聴きに行ったりした。が、彼には宗教の門はくぐれなかった。友人長崎太郎は彼にキリスト教を説いた。そしてキリストに倣うことを勧めた。長崎とのやりとりの感想が『父と子』に記されている。以下のようだ。

級友長崎が或時「基督の模倣」（Imitation of Christ）と言うことを主張した。それは或る西洋人

の著者から得た考えではあるが、吾々は完全なる人間―神の子―基督に対しては最早批評する余地はない、唯模倣すれば宜いのだと説いた。私はそれに反対した。どんなに偉大な人間にだって批評の余地はある、批評もせずに模倣するだけなら自己の個性や独自性は無くなる、極言すればそれは最早自己ではなくて他人である、模倣は創造に及ばない、吾々は自己を創造しつつ成長発展しなければならぬ、と私は主張した。

藤岡蔵六は、あくまで理性の人であろうとした。それゆえに長崎太郎の言説に同意できないのであった。彼は哲学を専門に学ぼうとした。芥川龍之介や井川恭や成瀬正一などと一緒の寮生活は、文科的色彩が濃厚であった。蔵六は仲間にも刺激されて、多くの本を読んだ。彼が当時読んだ本は『父と子』によると、漱石・鴎外・潤一郎・武者小路実篤らの作品であり、西田幾多郎の『善の研究』も「興味深く読んだ」という。また、一高の図書館で『トルストイ全集』を見出し、『生い立ちの記』や『復活』を熱心に読んでいる。

日本人の手に成る最初の本格的哲学書とされる大西祝（はじめ）の『西洋哲学史』[18]を、数ヶ月かけて読了するも一高時代のことである。三並良の主宰していたオイッケン会にも入っている。ルドルフ・オイッケンは、ドイツの哲学者である。当時オイッケンは日本の思想界に輸入され、はやっていたのである。

三並良は自由キリスト教の牧師でもあり、一高ではドイツ語を担当していた。蔵六は「私が一高在学中諸先生の中で最も強い感化を受けたのは、新渡戸校長と三並先生とであった」と『父と子』に書き込んでいる。

芥川に「気鋭の人新進の人　恒藤恭[19]」という人物記がある。そこに恒藤恭を語りながら藤岡蔵六に言及した次のような箇所がある。――「恒藤は又謹厳の士なり。酒色を好まず、出たらめを云はず、身を処するに清白なる事、僕などとは雲泥の差なり。同室同級の藤岡蔵六も、やはり謹厳の士なりしが、これは謹厳すぎる憾（うらみ）なきにあらず。「待合のフンクティオネン（筆者注、ドイツ語で諸機能の意）は何だね？」などと屡（しばしば）僕を困らせしものはこの藤岡蔵六なり。藤岡にはコオエンの学説よりも、待合いの方が難解なりしならん。」

芥川によれば、藤岡蔵六は「謹厳すぎる憾なきにあらず」で、あたかも石部金吉のように写ったと言うのだ。一高時代の蔵六は、そう見られても致し方ない面があったのである。

（以下次号）

注

1　芥川龍之介「学校友だち―わが交友録―」『中央公論』一九二五年二月一日

2　菊地弘・久保田芳太郎・関口安義編『芥川龍之介事典』明治書院、一九八五年十二月十五日

3　小著『芥川龍之介とその時代』筑摩書房、一九九九年三月二十日

4　小著『芥川龍之介の手紙』大修館書店、一九九二年十月一日

5　藤岡蔵六『父と子』私家版、一九七一年九月（日付なし）

6　藤岡真佐夫『アジア開銀総裁日記』東洋経済新報社、一九八六年十二月十八日

7　野田弥三郎「薄幸の哲学者…藤岡蔵六さんを偲ぶ」旧制甲南高校弁論部『萌草会報』第2号、一九八二年六月十三日

8　『出隆自伝』（出隆著作集7）勁草書房、一九六三年十一月二十日

9　藤岡真佐夫『父母の思い出とともに』私家版、一九九八年十一月（日付なし）

10　獅子文六「てんやわんや」（『毎日新聞』一九四八年十一月二十二日～一九四九年四月十四日

11　藤岡喜六「藤岡一族家系図」私家版、一九八四年三月一日

12　スマイルズ・中村敬宇訳『西国立志篇』、一八七一年、六か月にわたって十一冊分冊で刊行、のち『西国立志編』として博文館刊

13　押川春浪『海島冒険奇譚海底軍艦』文武堂、一九〇〇年十一月二十三日

14　『日本キリスト教歴史大事典』教文館、一九八八年二月二十日

15　『官報』第二七六号（大正二年七月二日）の「学事」欄による

16　『官報』第一一八四号（大正五年七月十二日）の「学事」欄による

17　小著『恒藤恭とその時代』日本エディタースクール出版部、二〇〇二年五月三十日

18　大西祝『西洋哲学史』初版一八九三年、蔵六の用いたのは警醒社書店版、上巻、一九〇三年九月二十一日、下巻、一九〇四年一月六日

19　芥川龍之介『改造』一九二二年十月、のち「恒藤恭氏」と改題『梅・馬・鶯』新潮社、一九二六年十二月二十五日収録